

豊庄だより



第 596 号 2020 年 1 月 6 日

あけましておめでとうございます。2020 年が始まりました。今年の干支（えと）はネズミ、子（ね）です。十二支（じゅうにし）にまつわる中国の昔話に、こんな話があります。

福岡市早良区南庄 2-26-13
社会福祉法人林生会豊庄保育園
園長 西尾 達

むかしむかし、神様が森の動物たちを集めてこういいました。「正月 1 日の朝、御殿に来なさい。早く来たものから順に十二番まで、その年の大将にしてあげよう！」と。これを聞いて動物たちは大張り切り。一番乗りはイノシシだったのですが、速すぎてゴールを通り過ぎてしまいました（昨年のイノシシ年はそんなわけで十二番目でした。）。そこで、自分はゆっくりしか歩けないと早くから出発した牛が一番になったと思いきや、なんと牛の背にちゃっかり乗り、ゴール直前に飛び降りたネズミが一番乗りを果たしました。というわけで十二支のはじまりは、「子（ね）」になりました。このことから「ネズミはずるい」と思う人もいるかも知れません。しかし、小さくて弱い動物が精一杯知恵を働かせたと成果とも言えます。微力であっても無力ではありません。私もコツコツとがんばっていくつもりです。

さて、私の新年の始まりは、これまで切り抜いていた新聞記事に目を通すことからでした。気になって保存はしていたものの、なかなか時間が取れず、読まないままにしていた記事とひとつずつ向かい合いました。保育に関すること、人権や平和に関することにどうしても目がいきますが、やはり一番中村哲さんのことが気になりました。

昨年 12 月 4 日の悲報から 1 ヶ月近くが経ち、その量は減ってきたものの載っていました。中でも西日本新聞は元日の一面に掲載し（タイトルは「中村哲という生き方」）、その後も、3 回にわたって特集していました。元日の 1 回目は中村さんの活動の原点である若松と西南学院中学時代のことが書かれていました。若松は中村さんが 2 歳の時に 移り住んだところ。母方の実家があり、祖父は玉井金五郎。火野葦平（中村さんの伯父）の小説『花と龍』のモデルになった人です。「率先して弱いものをかばえ」「どんな小さな命も尊べ」と教えられたことが中村さんの著書にも書かれています。西南学院中学ではキリスト教との出会い。牧師だった藤井健二さんの自宅をしばしば訪ね、文学と自然が好きな中村さんは、「伯父貴のようになりたい」と 15 歳ほど年齢差があった藤井さんに語っていたということでした。2 回目は、俳優の故菅原文太さんとの交流、テロ対策特別措置法が国会で審議された時の「自衛隊派遣は有害無益でございます」と参考人としての証言、アフガニスタンの取水堰のモデルとなった福岡県朝倉市の山田堰のことなどが書かれていました。最終回の 3 回目では、アフガニスタンで専属運転手をしていたザイヌツラさんをはじめ現地スタッフとのつながりについて紹介。中村さんが「右腕」と頼りにしていた現地の NGO「PMS」（平和医療団）のアジア・ウル・ラフマン医師の「先生は医師であり、技術者であり、哲学者であった」「日本、アフガン両国には『ナカムラ学校』の生徒たちが多くいます。わたしたちは先生の哲学とスピリットでつながっているのです」と述べた事業継続を誓う言葉で締めくくられていました。

次は毎日新聞（1 月 4 日）。銃撃事件のとき何度もペシャワール会の広報担当として登場していた福元満治さんの談話です。福元さんは出版社「石風社」の代表で、2 人の出会いはペシャワール会が発足して 4 年後の 1987 年。現地でハンセン病の治療にあたった中村さんが新聞に寄稿した文章を読んだのがきっかけで、「患者やアフガン難民との関係の深さに嫉妬した。この人の本は自分が出さなければと思うと同時に、編集者と著者との付き合いにとどまらない予感があった」と当時を振り返っています。それ以降、他社の出版物を含め、中村さんの発表する文章のほぼ全てを仲介し目を通してきたそうです。今、中村さんの死を、「涙は出ない。あるのは喪失感だけだ」と述べる一方、生前、後継者について尋ねたとき、中村さんは「私の後継者は用水路だ」の一言だったそうです。機会があれば、福元さんの講演会を企画したいと思っています。



今年の羽子板
作：絵画教室井上先生